

「早期大腸癌 発生から診断・治療まで」

東京女子医科大学助教授・消化器内科 長 廻 紘 編

近畿大学教授・第1外科

安 富 正 幸

本書は普通の早期大腸癌の解説書ではない。いま世界で注目を集めている表面型の早期癌を中心に、大腸癌の発生から進行癌に至る新しい考え方を示した書である。

表面型の早期癌、特に平坦陥凹型の癌は、日本の内視鏡専門医によりごく最近になって重要性が証明された癌である。本書ではこの表面型早期癌に関する存在診断、質的診断から量的診断、治療方針まで、更に大腸癌の組織発生、増殖進展から進行癌に至る経過、この間に現れる遺伝子変化までの最新の知識が集大成されている。ここで“最新の知識”という表現は間違っているかもしれない。むしろ、執筆している14人のエキスパートの豊富な経験から生まれる早期大腸癌についての考え方や哲学が盛り込まれていると言うべきであろう。現在、いろいろな学会で繰り広げられている大腸癌に関する議論を目の当たりにすることができて興味深い。

表面型の大腸癌はまだ国際的には認知されたということとはできない。また、最新の知見であるから執筆者の間でも意見の相違があることも当然のことである。この意見の相違が浮き彫りにされていることも魅力である。

ポリープの癌化をめぐる論争は

30～40年前にCastlemanやAckermannによって繰り返されたが、1970年代になって、大腸内視鏡の発達によりポリープ、特に腺腫の癌化は証明され、大腸癌の大部分は腺腫由来であると考えられるようになったのである。表面型の癌の存在は報告されてはいたが、極めてまれなものであると考えられ、adenoma-carcinoma sequenceに関心が集まっていたのである。ところが、優れた解像能を持つ電子内視鏡の普及とstrip biopsyの技術の進歩と共に平坦陥凹型の早期癌が発見されるようになってきた。大腸癌の歴史で最大の発見であり、考え方の革命である。

大腸内視鏡検査を行う者は、平坦陥凹型の早期癌を頭の中でイメージしながら大腸粘膜を観察しなければならない。今までのように粘膜面からの隆起を探せばよいのではなく、わずかな色彩の変化や微小な出血点、血管透見性の変化などによって早期癌の存在を疑い、strip biopsyの技術によって組織を採取し、顕微鏡による組織診断に委ねるのである。本書に掲載されている沢山のカラー写真は、読者が平坦陥凹型の早期癌がどのようなものかというイメージを持つのに役立つことであろう。

粘膜内癌の組織診断には幾つかの

問題がある。癌と異型上皮との区別が難しいことがあり、診断者の主観によって異なった診断がつけられていることがある。この問題についても争点が浮き彫りにされていてたいへん興味がある。間もなくこの問題は解決されなければならない。平坦陥凹型の粘膜内癌は直径10mm以下で粘膜下層に浸潤することが多く、短期間のうちに進行癌に移行する。欧米の多くの意見のごとく平坦陥凹型の癌の重要性を認めず、粘膜内癌を癌と考えない立場からは大腸癌の発癌機構の解析は困難であるし、早期診断もおぼつかない。それどころか、学問的にも大きな間違いを犯している。平坦陥凹型の癌は日本で生まれた最近のヒットである。

しかし、そこには私たちの手で解決しなければならない幾つかの問題も残っている。本書は単に知識を得るための書ではなく、執筆者たちの思想の集大成であり、今日私たちが抱えている問題を理解し、今後進むべき道を示してくれる書である。大腸癌に関係のある人達に読んでいただきたい書である。

● B5 240頁 図115 写真129
原色図162 色図3 1993 定価
22,660円(税込) 千400

医学書院 刊(☎ 03-3817-5657)